

# 私立 関西大学

プログラムの名称：広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ  
 -- 関西大学で育む21世紀型学生気質

プログラム担当者：副学長 芝井 敬司

キーワード

1. 学生総ピア・サポータ体制 2. 知徳体 3. 社会人基礎力  
 4. 学生気質 5. 人間力

## 1. 大学の概要

関西大学は、市民のための法律家の育成を目指して、関西で初の法律学校として開学された。2007（平成19）年4月現在、10学部8大学院研究科2専門職大学院を擁する総合大学として、総数約27,000名の学生が学んでいる。

大学の教育研究の指導理念として「学の実化」を謳い、具体的な教育目標として「学理と実際との調和」「国際的精神の涵養」「外国語学習の必要」「体育の奨励」を掲げ、一貫して社会・市民の啓発と教育に取り組んできた。

特に「学理と実際との調和」を実践すべく、教室で行われる講義（座学）に偏重することなく、社会の縮図としてのキャンパスにおける人間関係、組織における行動のあり方、日々の節制や努力の尊さ等を実践的に学び取り、自ら気づきを得ることを重視してきた。本学の30万人を超える校友の中から、リーダーとなって社会で活躍し得る人材を数多く輩出してきた所以である。

2008（平成20）年度から実施する「全学共通教育改革」も、学理と実際との調和の理念に基づき、従来「正課教育」が目指してきた「専門的知識」のみでなく、現代の若者に求められる「社会人基礎力」の修得を目指す。

本学が実施するプログラムは、上記の教育理念を基幹として、21世紀に必要とされる人材を養成すべく、学生が成長を遂げるための取組である。

## 2. 本プログラムの概要

本プログラムは、関西大学の学生が豊かな人間力（21世紀型関西大学学生気質）を備えることで、本学独自の学生文化（学生が主体性をもって構築する大学環境）を育み、21世紀の知識基盤社会を支える人材として活躍す

るために必要な「社会人基礎力」を修得することを目的としている。

また、新たな取組として、関西大学が全学レベルで「学生が求める学生支援を学生自らが実践する」、すなわち「学生総ピア・サポータ体制」を構築し、学生の自立した意識に基づく「ピア・コミュニティ」の創出を目指す。

2008（平成20）年度から実施される「全学共通教育」の改革趣旨とも連動して、ピア・サポータ養成に関する新たな講座である「関西大学におけるピア・サポートを考える」をピア・サポータ養成講座として開講することにより、「ピア・サポータ」としての資格認定を、正課教育と正課外教育において行うものである。

## 3. 本プログラムの趣旨・目的

本プログラムは、2008（平成20）年度から実施する「全学共通教育改革」と連動しつつ、新規開講するピア・サポータ養成講座「関西大学におけるピア・サポートを考える」によって、全学生が「意識（徳）」を新たに、本学に必要なピア・サポートを考え企画し行動することによって、「正課教育」や「正課外教育」「資格取得」等で修得した「専門的知識や技術（知）」を「実践（体）」するピア・コミュニティを創出するものであり、ピア・サポータとしての活動を通じて、本学学生が「社会人基礎力」を修得することを目的とした取組でもある（図1）。

そもそも本学は「正課教育」とともに「正課外教育」にも重点を置いてきた。学生が運営する体育会・文化会・学術研究会・同好会も約290団体を数える。関西地区の他の私立大学と比較しても、学生の活発な自主活動を誇り得る数である。こういった大学環境を形成するに至った学生気質が、学生の自主性と本学特有の「学生文化」を育んできた。ところが、この学生気質に、近年下記のような変化が生じつつある。

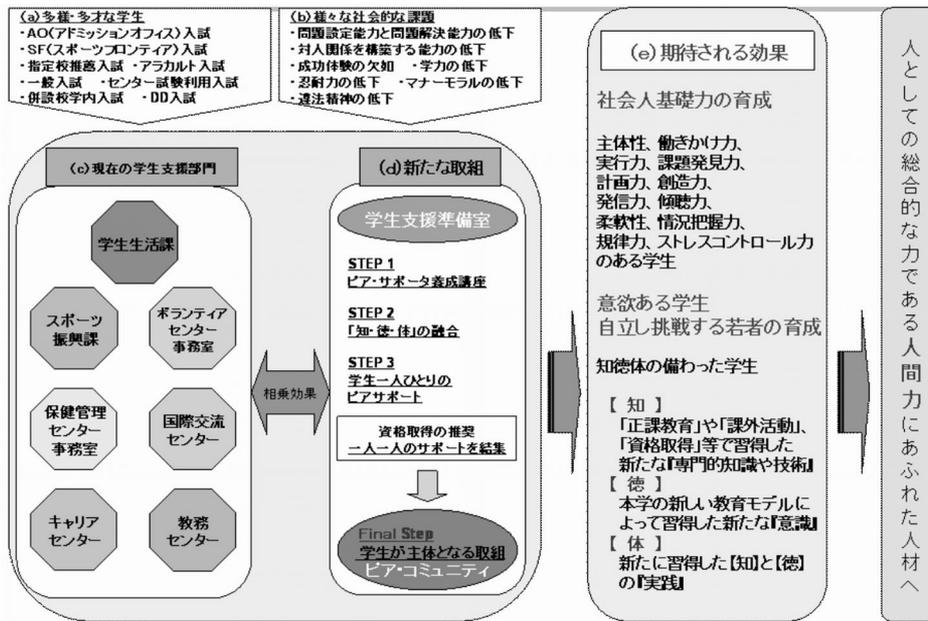


図1 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラムの提案

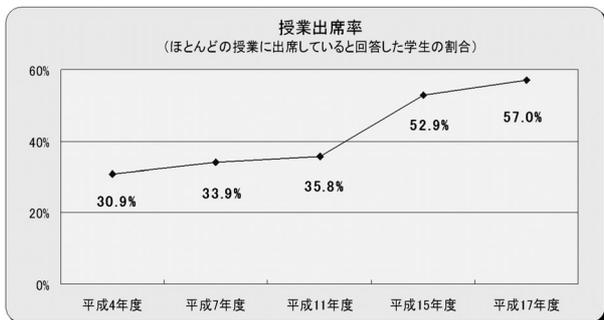


図2 授業出席率

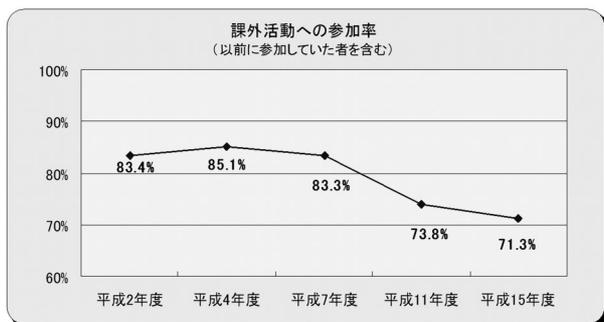


図3 課外活動への参加率

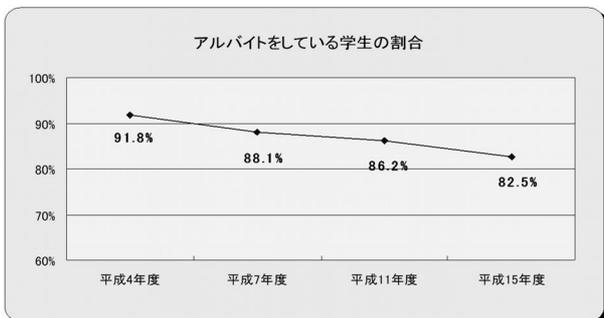


図4 アルバイトをしている学生の割合  
 出所: 「本学学生生活実態調査」

- (1) 「正課教育」を重視する学生の増加 (図2)
- (2) 「課外活動」に参加する学生や、アルバイトを行う学生の減少 (図3・図4)
- (3) 大学への帰属意識の希薄化
  - ・学生文化の集大成である統一学園祭へ参加する学生が減少
  - ・関西学院大学との伝統の一戦である総合関関戦で応援に興じる学生が激減
  - ・関西大学学歌(メロディを含む)を歌えない学生の増加など

本学学生にも、全国的に指摘される「現代の若者気質」が浸透しつつある。ただし本学の場合、「大学ランキング」(図5・図6)に示されるように「社会人基礎力」に富んだ、社会や企業が求める学生が育成されているという点で、社会的評価を集めているとも言える。

しかしながら、一昔前に比べ本学学生の学生気質や本学特有の学生文化が失われつつあることも事実であり、本学にとって望ましいことではない。旧き良き時代の学生文化を復興するのではなく、21世紀にふさわしい学生文化を構築し得る「意識改革」を図るとともに、その意識を基盤に、大学が学生自ら活動し得る環境作りをより一層支援する必要がある。

以上のとおり本プログラムは、本学固有の事情を踏まえて実施するものである。

本プログラムは、21世紀の知識基盤社会を支える人材として、本学学生が成長を遂げることに意義を有する。本学には、正課教育とともに、学生が正課外教育における自主活動を行うことによって、卒業後に評価を得る「豊かな人間力」を育んできた経緯がある。本

RANKING			
企業からの評価			
[役に立つ] 大学			
[役に立つ大学] (2006年, 2000年)			
大学	2006年 偏差値	2000年 偏差値	2000年 順位
1 早稲田大 (文系)	72.7	70.5	1
2 早稲田大 (理系)	69.1	69.5	3
3 慶應義塾大 (文系)	67.2	65.9	4
4 東京工業大	63.0	64.2	6
5 京都大 (理系)	62.4	70.0	2
6 東京大 (理系)	61.5	63.7	7
7 一橋大	61.1	61.3	10
8 慶應義塾大 (理系)	60.8	61.4	9
9 東北大 (理系)	60.7	58.1	13
10 同志社大 (文系)	60.5	60.0	11
11 立命館大 (文系)	60.4	53.6	22
12 大阪大 (理系)	59.8	63.5	8
13 京都大 (文系)	58.5	64.6	5
14 東京理科大	58.5	55.0	19
15 大阪大 (文系)	58.2	58.0	14
16 九州大 (理系)	58.1	57.8	15
17 中央大 (文系)	57.7	51.7	28
18 関西学院大	56.9	52.5	23
19 九州大 (文系)	56.5	49.4	32
20 東京大 (文系)	56.1	59.0	12
21 上智大	55.8	53.9	20
22 明治大 (文系)	55.6	52.0	25
23 名古屋大 (理系)	55.2	56.2	16
24 神戸大 (文系)	55.2	55.7	17
25 横浜国立大 (文系)	55.1	50.6	30
26 関西大 (文系)	54.7	48.4	34
27 横浜国立大 (理系)	53.9	51.8	27
28 同志社大 (理系)	53.8	50.7	29
29 北海道大 (理系)	53.7	53.9	20
30 慶應義塾大 (湘南藤沢)	53.3	55.5	18
31 神戸大 (理系)	52.9	52.2	24
32 立命館大 (理系)	52.5	45.8	37
33 立教大	52.2	44.2	41
34 名古屋大 (文系)	51.7	51.9	26
35 東北大 (文系)	51.6	47.7	36
36 北海道大 (文系)	50.1	48.0	35
37 筑波大 (理系)	49.8	49.5	31
38 法政大 (文系)	49.8	40.4	51
39 青山学院大	47.5	45.5	39
40 中央大 (理系)	46.8	41.5	49
41 日本大 (文系)	46.7	32.2	57
42 広島大	46.5	45.0	40
43 首都大学東京	46.4	45.8	37
44 明治大 (理系)	45.2	43.3	45
45 東京外国語大	45.0	49.4	32
46 筑波大 (文系)	44.4	42.3	48
47 関西大 (理系)	44.4	41.4	50
48 日本大 (理系)	44.4	34.7	56
49 大阪府立大	43.2	44.0	42
50 金沢大	41.8	—	—
51 電気通信大	41.7	39.9	52
52 大阪市立大 (文系)	41.5	43.8	44
53 大阪市立大 (理系)	41.1	42.8	46
54 法政大 (理系)	41.1	35.2	55
55 芝浦工業大	40.5	39.2	53
56 国際基督教大	38.2	43.9	43
57 津田塾大	37.3	37.6	54
58 東海大	36.5	29.8	60
59 名古屋工業大	35.6	42.7	47
60 武蔵工業大	35.6	31.9	58
61 専修大	34.6	—	—
62 神奈川大	33.8	30.6	59
63 成蹊大	33.8	—	—
64 近畿大	32.7	—	—
65 福岡大	29.5	—	—
66 甲南大	27.6	—	—

図5 社会人基礎力の裏づけとなる  
本学学生の就職力に関する資料  
(「2008年版 大学ランキング」 朝日新聞社)

プログラムを実施することは、本学の学生気質（学生力）を呼び覚ますとともに、21世紀社会における大学評価の向上を図る効果が期待できる。

#### 4. 本プログラムの独自性（工夫されている内容）

本プログラムは、本学が2008（平成20）年度から実施する「全学共通教育改革」と連動し、その教育理念を实践させる取組であることに、新しい発想や独自の創意工夫を主張し得る。

学生の实践能力とその達成感を高めるために「正課教育」を行うと同時に、「学生支援準備室」（学生センター内に新設）においてカリキュラムを編成する「正課外教育」を実施する。具体的な内容としては、下記のとおりである。

- (1) 学生総ピア・サポータ体制の構築を目的として、全学共通教育科目にピア・サポータ養成講座「関西大学におけるピア・サポートを考える」を新規開講科目として設置。ピア・サポートに関する基礎的な知識と、その実践に必要なコミュニケーション能力

RANKING			
企業からの評価			
[役に立つ] 大学			
就職支援に熱心(2006年)		採用における重視点(2006年, 2000年)	
大学	偏差値	重視点	2006年得点 2000年得点 2000年順位
1 立命館大 (文系)	77.3	積極性	90.4 90.3 1
2 立命館大 (理系)	75.7	コミュニケーション能力	86.3 74.3 4
3 関西大 (理系)	65.7	協調性	80.1 75.6 3
4 関西大 (文系)	65.5	業務・社風への適性	73.0 81.8 2
5 近畿大	63.2	感情の安定性	69.6 68.4 5
6 日本大 (理系)	63.2	リーダーシップ	63.2 65.0 6
7 東海大	62.7	筆記試験の成績	42.4 52.4 8
8 同志社大 (文系)	61.7	専門的な知識・技術	38.5 50.0 9
9 中央大 (文系)	61.0	大学での成績	26.8 42.2 10
10 日本大 (文系)	60.7	読学力	26.5 37.2 12
11 明治大 (文系)	60.5	パソコンの習熟度	24.8 55.4 7
12 同志社大 (理系)	60.4	大学名	18.6 37.3 11
13 関西学院大	59.9		
14 中央大 (理系)	59.8		
15 明治大 (理系)	59.0		
16 法政大 (文系)	58.9		
17 専修大	58.5		
18 東京理科大	57.6		
19 法政大 (理系)	57.6		
20 青山学院大	56.3	1 人格能力への取り組み	75.7 72.0 3
21 芝浦工業大	56.3	2 専門教育の充実	74.7 80.1 1
22 神奈川大	56.3	3 一般教育の充実	65.2 60.2 7
23 立教大	55.6	4 教員のレベルアップ	64.5 66.1 5
24 武蔵工業大	54.0	5 研究体制の充実	60.1 68.1 4
25 早稲田大 (文系)	53.6	6 パソコン・通信環境の充実	60.0 72.0 2
26 早稲田大 (理系)	53.2	7 先進的なカリキュラムの構築	59.9 65.6 6
27 福岡大	52.0	8 就職指導の強化	56.1 44.6 9
28 慶應義塾大 (湘南藤沢)	51.9	9 職員のレベルアップ	53.9 50.0 8
29 甲南大	49.9	10 学長のリーダーシップ	41.5 41.2 10
30 成蹊大	49.4	11 入試難易度を高める	35.2 31.5 13
31 慶應義塾大 (理系)	49.3	12 校風の浸透	31.4 32.7 11
32 上智大	48.6	13 大学院重点化の推進	24.8 32.7 11
33 慶應義塾大 (文系)	48.5	14 好立地のキャンパス	20.1 18.5 15
34 電気通信大	48.4	15 規模の縮小	15.7 18.8 14
35 筑波大 (理系)	46.5	16 規模の拡大	10.5 8.9 16

図6 本学の就職支援と求められる  
社会人基礎力に関する資料  
(「2008年版 大学ランキング」 朝日新聞社)

などを育成する。また、本学に相応しいサポート体制を考えるために本学の歴史や理念等の講義も行う。

- (2) ピア・サポートに必要な知識や技術等を修得するために「正課外教育」の実施。

- (3) ピア・サポートに必要な知識・資格取得を奨励。学生による相互支援体制は、すでに実施する大学が多い。この体制によって、学生が「社会人基礎力」を備えていくことが期待される。ただし現在すでに実施されている大学の多くは、入学当初から「ボランティア活動」等に関心を持つ一部の学生の意識を基盤としている。

本学が2008（平成20）年度から開講する「全学共通教育」科目では全学生を対象として実施する。取組のねらいは「学生総ピア・サポータ体制」の構築であり、教育理念の实践である。「正課教育」を重視する学生が増加傾向にあることに鑑みれば、他大学のモデルとなる。学生の自主性と企画力育成にも資し、学生が必要とする資格の取得を奨励することも、この種の取組においては例を見ず、今後のモデルとなることが予想される。

5. 本プログラムの有効性（効果）

本プログラムは、「現代の若者気質」を「真に自立し社会に貢献できる若者」に向かわせるうえで有効である。ピア・サポータを結び集める「ピア・コミュニティ」を創出させることで、学生が大学主催行事に参画することも可能となる。これまで教職員が行ってきた各種の大学行事に、学生が自らの企画により参画することは、大学にとっても創造的で多大な効果を期待し得る。社会的ニーズのみならず、学生ニーズをも視野に入れて、大学主催の各種行事を学生が主体的に展開することは有意義である。

大学で何を学び、学んだことをいかに実践するか、本プログラムは学生が自ら考え、実践する契機を提供する場となる。自ら企画し実践することは、大学から与えられるままであったこれまでの生活を一新する。例えば、外国語を習得した学生であれば留学生支援を始めることが、心理学を学ぶ学生であればピア・カウンセリングを始めることが期待できる。

またこの実践は大学内に留まらず、体育会に所属する学生であれば、自ら有する運動能力に加えてスポーツ指導者基礎資格取得によって地域社会におけるスポーツ指導を展開することが期待できる。こういった地域活動を企画するべく「課外活動」のマネジメントを開始する学生も現れよう。本プログラムは、これまでの学生支援と比して、図り知れない効果を生み出すことになる。

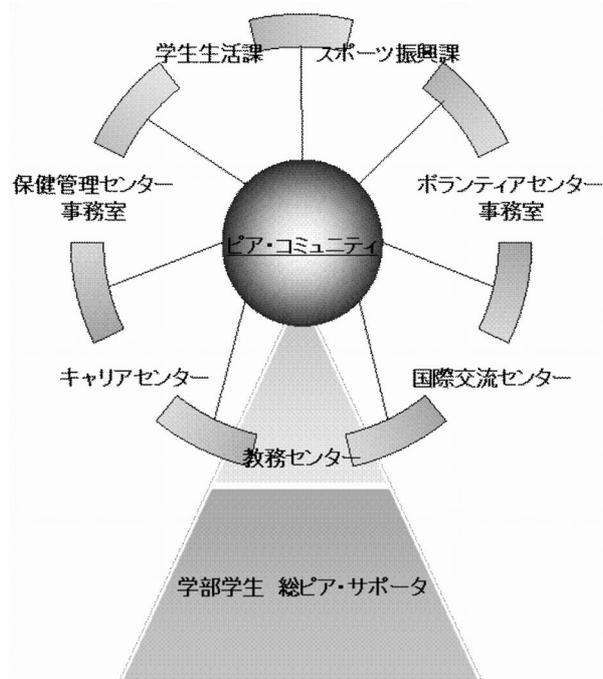


図7 今後の学生支援概念図

本学は、学生像の変化あるいは社会的ニーズを鑑みた学生支援組織を設置し、各組織が、それぞれの職掌において学生支援を進めてきた。しかし本プログラムを実施することによって、本学の学生支援体制は、従来のように教職員だけではなく、学生相互が支援し合う体制に変貌する。学生・教育職員・事務職員という大学における密接不可分の三つの構成要素を資源として、学生たちは自らが必要とする支援を企画する。そして各組織の職掌を横断することにより、従来の支援体制を補う役割をも果たすことになる（図7）。

このことは現在の支援体制との相乗効果が見込まれるところでもある。ひいては「ピア・コミュニティ」において学生が各支援組織を結ぶことによって、有効性の高い支援が開始されることとなる。

社会的ニーズは「社会人基礎力」の育成・社会貢献の実施にある。高度な「専門的知識や技術」を基盤とする「ピア・サポート」の実践は必ずや「真に自立し社会に貢献できる若者」を育成する。一方、学生ニーズは「正課教育」や「資格取得」である。それらに「正課外教育」を加え、その成果実践を図る本プログラムは、「資格取得」や「ダブル・スクール」を意義付け、学生のキャリア形成支援を行ううえでも有効である。

2008（平成20）年度実施の「全学共通教育改革」に連動して、新しく掲げる共通教育理念の実践の場であるという意味で、本プログラムは教育活動と関連性を有する。学生がピア・サポートを実施するために、高度な「専門的知識や技能」を修得することは研究活動を推進するために有効である。新講座の開講・運営と「ピア・コミュニティ」創出に向けて、「専門的知識」を修得する大学院生をRA・TAとして採用することは関西大学の学是「学の実化」の具現化でもある。

6. 本プログラムの改善・評価

本プログラムのねらいは「学生の意識改革」にあるが、実際にはこのような取組を「正課教育（全学共通教育）」で意義付けるために「教職員の意識改革」が必要となる。学生支援準備室が中心となって、大学内で意思統一を図るために評価体制を確立し、単なる数値による「成果評価」でなく、プロセス重視型評価を独自に展開する。具体的には、

- (1) 新規科目「関西大学におけるピア・サポートを考える」の開講。受講生アンケートと受講修了者の追跡アンケートを独自に実施し、本取組の成果を毎年確認し、データブックを刊行。

- (2) 全学共通教育推進機構小委員会(自己点検)が行う「授業アンケート」を実施。
- (3) 「ピア・コミュニティ」と「学生支援準備室」において、活動報告書を発行。刊行物と大学Web上で学内外に公開。
- (4) FDフォーラムを実施し、教職員・学生の評価を仰ぐ。2009(平成21)年度には外部評価実施。

以上のように、十分な自己点検・評価を実施できる体制を構築し、経年的に自己点検、評価活動を継続する。

評価する観点としては、(i) 学生の意識が入学時から卒業に至るまでにどのように変化したか (ii) 学生がどういったピア・サポートを実施したか (iii) ピア・コミュニティの活動に積極的に参加したか (iv) この学生支援において、教職員の意識はどのように変化したか (v) 教職員が積極的に取り組めたか (vi) 従来の支援組織とどのような関連性をもって活動したか、等の観点をもって評価する。

また、評価結果の活用方法は、(i) 新講座担当者とTA (ii) ピア・コミュニティ設置を企画・支援するRA (iii) 実際にピア・サポートを実施する学生 (iv) 学生支援準備室の教職員 (v) 従来から支援活動を行ってきた各組織の業務改善等に活用する。このことにより、変化する学生気質や社会的ニーズを踏まえた学生支援活動に対応する、本学に相応しい学生支援体制を再構築し、改善を図ることとする。

## 7. 本プログラムの実施計画・将来性

本プログラムの実施計画について、各年度の運用方法は下記のとおり。

- (1) 2007(平成19)年度
  - (i) 学生支援準備室の設置
  - (ii) 全学共通教育の準備(テキスト作成・シラバス作成)
  - (iii) 「ピア・コミュニティ」設置準備
  - (iv) 「ピア・サポート」に関する勉強会を随時開催
  - (v) 国内の大学・大学院における「ピア・サポート」の活動実態等の調査
- (2) 2008(平成20)年度
  - (i) 全学共通科目(新規開講科目)を開講、春学期「関西大学におけるピア・サポートを考える」
  - (ii) 「学生支援準備室」による正課外教育プログラムを

実施

- (iii) 国内外の大学・大学院における「ピア・サポート」の活動実態等の調査。勉強会を随時開催
- (iv) 「ピア・コミュニティ」準備委員会を設置
- (3) 2009(平成21)年度
  - (i) 全学共通科目としての新規科目の本格的開講
  - (ii) 「ピア・コミュニティ」結成、随時勉強会を開催
  - (iii) 「学生支援準備室」における正課外教育プログラムを実施
  - (iv) FDフォーラム(新規開講科目に関する報告)開催と外部評価
- (4) 2010(平成22)年度
  - (i) 全学共通科目としての新規科目の本格的開講
  - (ii) ピア・コミュニティの本格的な活動、随時勉強会を開催
  - (iii) 「学生支援準備室」による正課外教育プログラムを実施
  - (iv) FDフォーラム(学生を中心とする報告)開催、報告書作成

本プログラムの将来計画、組織性確保の方法については、本学学生センター内に「学生支援準備室」(RA・TA・学生・教職員で構成)を設置することにより具体的に検討する。

学生センターが「全学共通教育推進機構教養部門委員会」等と連携して、学生の意識改革を促す新講座開講に向けて活動を開始する。また「同機構FD部門委員会」と連携して、教職員の意識改革を図る。

新講座開講以後は、受講生が自主的に「ピア・コミュニティ」創出に参画するよう「学生支援準備室」において支援を行う。そして学生は本学に必要なピア・サポートを企画し、「学生支援準備室」を通して、その実現を図る。

また、「ピア・コミュニティ」創出後は、すでに各種支援を行ってきた本学組織と連携することによって、あるいは本学で活動する既存の学生活動団体と連携することによって活動する。ピア・サポートを結び集める「ピア・コミュニティ」を創設し、運営するためにRAを、新規科目を開講・運営するためにTAを採用する。

このような学生によるピア・サポート体制を実施する他大学の状況等、先行例にも学ぶところが多く、すでに実施する他大学の教職員に協力を要請することも考えたい。物的整備としては、学生の福利厚生施設で

## 事例43 関西大学

ある総合学生会館が完成しており、ピア・コミュニティのためのブースを設置し得るオープンスペースが用意されている。

補助期間終了後も継続的に本プログラムを実施することとし、「ピア・コミュニティ」を中心に、学生自らが、全学的な学生相互支援活動を企画・実施すること

になる。また、いわば「大学におけるインターンシップ」として、大学院生にも有効な研究と実践活動の場を提供することとなる。全学的な点検・評価を年度ごとに実施し、学生自らが毎年活動内容を見直し、改善を図り続けることによって、関西大学における学生支援のための学生団体として活動することが期待できる。

### 選 定 理 由

関西大学においては、学生支援に対する理念や目標、現在の取組の組織性、社会的ニーズや学生のニーズへの対応の現状、教職員の資質向上、現在の取組の実施後の評価及び取組内容の改善などを着実に実施されています。昭和30年から組織的に実施されている「学生生活実態調査」、企業からの評価である「役に立つ大学2008年版大学ランキング」の順位や偏差値、平成18年度の文部科学省・現代GPの採択等は、関西大学の取組の実際や成果として、特筆すべき点と言えます。

また、今回申請のあった「広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ - 関西大学で育む21世紀型学生気質」の取組は、学生がピア・サポート体制を創出し、社会人基礎力を習得する点に、関西大学の独自性が認められ、高く評価されます。本取組は、平成20年から実施する「全学共通教育改革（正課教育）」と連動したものとなっており、全学生を巻き込んだ大きな構想であり、注目すべき取組であると言えます。

特に、独自に展開されるプロセス重視型評価は期待するところが大きく、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。新たな取組の実施計画は具体的で、人員配置を含む組織計画も整っており、発展の可能性があると判断します。